

東近江市環境円卓会議

—みんなで語り合う東近江の森「いま」と「これから」—

里山学研究センター・博士研究員

太田 真人

日時：2018年12月19日（水） 19：00～21：30

場所：永源寺コミュニティセンター もみじホール

主催：環境円卓会議 運営委員会

「鈴鹿の森おこし」推進ワーキンググループ

東近江市円卓会議とは、第2次東近江市環境基本計画をチェックする場として設けられている。今回は、地域の森林にかかわる様々な分野の専門家や市民が集まり今後の森づくりの視点を探ることを目的としていた。

セッションⅠでは、まず初めに「鈴鹿の森おこし」推進ワーキンググループの水田有夏志氏から東近江市の森の「これまで」、「いま」、「これから」という内容の発表があり、「これから」を考えるテーマ提案が行われた。その後、森林所有者代表として東近江市箕川町の川嶋富夫氏、永源寺森林組合から落部弘紀氏、森の生き物の専門家としてびわ湖の森の生き物研究会の山崎亨氏、溪流と森について愛知川上流漁業協同組合の池田則之氏、環境教育など育成について河辺いきものの森の丸橋裕一氏、鈴鹿10座エコツーリズムガイドクラブの今井康太郎氏の6名からそれぞれの視点からの東近江の森の「いま」について話が合った。森林所有者の川嶋氏は300年続く山を先代から引き継ぎ林業を行ってきた。箕川町は人工林率が80%でそれを誇っていたが現在は林業の衰退により20年植林を行っていない。それでも森林組合の助けのもと60%は間伐を行っているのでこの先100年はもつと考えている。家屋用としては売れないがその他のものとしては売れているので、森の利用価値の見直しを要望されていた。森林組合の落部氏からは森林組合の仕組みと近年は森林管理と間伐材の搬出がメインとなっているとの説明があった。林業衰退のもとこれまでは間伐を行っても切り捨て間伐であり、切ったまま山に放棄を行ってきたが、平成22年から温暖化防止対策の一環として国から間伐上乗せ補助金が出るようになり搬出するようになった。平成23年には搬出間伐材は約2000m³であったがそこから増加し、今年度には7000m³に達した。来年度は1万m³を目標座している。山崎氏からはイヌワシとクマタカの棲む森として東近江の昔と今の報告があった。42年前、山崎氏が初めて東近江でイヌワシを観察した際は6つがいであったが、ここ近年は1つがいしか観察されていなかった。残念なことに去年からその1つがいも見なくなり現在は0である。イヌワシがいなくなったのは森林の手入れが放棄されていることが原因である。実際に過去にイヌワシが狩りをしている写真をみても伐採後の草地などで行っていた。クマタカは営巣を30mもの高さの

天然スギで行い、多種多様なものを餌資源としている。東近江には複雑な気候や地形に合わせた多様な管理方法が行われてきた。それを改めに見直し、生き物のためではなく人のために健全な森を再生することでイヌワシたちが戻ってくるだろうとのことであった。漁業組合の池田氏も山崎氏と同様に生物のバランスが山には大切であるとした。魚は川があればいいだけではなくその川は山からの水により形成されている。しかし、奥山は手付かずであり土砂などがたまっている。現在、イワナの養殖をし、その多くを放流しているが、昔は警戒心が強く釣ることが難しかったイワナが放流されているものがほとんどとなり人に慣れ、自然と共生できない遺伝子になっているように感じる。これは、我々人も同じではないだろうかとなげかけられた。河辺いきものの森の丸橋氏は、これまでも多くの教育機関が河辺いきものの森を訪れ自然に触れあってきた。しかし、今はこのような整備や管理されたところでしか自然に触れ合えないと思っておられる方が多いと感じる。そこで2015年から「里山保育」と称し、保育園などに出向き保育園周辺で子供たちが自然に興味を持ち、自然は楽しい、面白いと感じてもらえるような活動も行っているとした。また環境教育の中でやはり、人間の役に立たない植物などをなくしてしまうのではなく、多様な生物がいることで教育がさらに良いものとなるとクサギを例に挙げ説明されていた。最後にエコツーリズムの今井氏は活動として、エコツーリズムのガイドだけではなく、登山道の整備や永源寺の道の駅に相談窓口としてビジターセンターを設立したり、登山口に停められている車の数やどこから訪れているのかなどの調査を行っている。エコツーリズムからの森の課題としてはやはり落葉広葉樹の紅葉や澄んだ川の水など自然を守っていくとこであるとした。

次に参加者全員で3～4人のグループに分かれ、「自分なりの「これから」の森づくりについて」意見交換を行う場が設けられた。私が参加したグループには森林組合の落部氏と市原と高野から来られた地元の農業を営んでおられる2名の方がおられた。お互いの自己紹介が終わりすぐに地元の2名の方が、我々は森といわれると河辺いきものの森のような、遊べる場所を想像するが、今回は森林の話であると思う。そして、林業を営んでいるわけでもないで自分なりにできることというのは非常に難しい話題であるとされた。しかし、その中でも一番考えるのはやはり人手不足についてとのことであった。代々引き継いできた仕事でも若手はどんどん流出しているので、どれだけ山のことを考えても管理をする手がない。よって自分たちにできることは息子や孫を地元に残すように山の大切さなどをしっかり伝えることではないかというものであった。これについてはその後席に戻り、(時間の関係上)数人がグループで話し合ったことについて発表する中でも挙手をして訴えられていた。

セッションⅡではセッションⅠで発表された方々が「「これから」の森づくりの視点」について簡単に語られた。山崎氏は、森林の持つ潜在能力の再評価が必要であるとし、池田氏は次世代のことを考えて行動していくべきとした。丸橋氏は、「人を教える人」の育成が重要であり、自然が相手であることを認識し長いスパンで考えていく必要があるとした。今井氏は、愛知川をきれいな川にするためにも豊かな水、豊かな山を維持していきたい。落部氏は、意見交換で挙げた内容をもとにご自身が滋賀県出身ではないが東近江の魅力にみせられ今があるので、行政にもっと外部や若手を受け入れる体制を整えてもらいたいとした。川嶋氏は、森林組合のこれまでの実績やデータを有効活用すれば保全につなげることができる。また、まだいい材になる木があるのだから良いものはちゃんと利用することが必要と訴えた。最後にテーマ提案者の永田氏から今後も東近江の市民の方と活動して森づくりを考えていき、漠然と行うので

はなく具体的なイメージを持ちながら整備などを行っていきたいとした。

最後に書記の方からの円卓会議のふりかえりが行われ、閉会した。